



ひるの星

No. 238

もくじ	
アブドル・バハの言葉 <small>ことば</small>	2
沖縄の子供 <small>おきなわ こども</small>	3
トルストイの話 <small>はなし</small>	8
どうやって奉仕する <small>ほうし</small>	13
ティッシュを使ったアート <small>つか</small>	14
点でなぞる <small>てん</small>	15
みんなの写真 <small>しきしん</small>	16
みんなの工作 <small>こうさく</small>	17
両親のページ <small>りょうしん</small>	18

「バハイであることは、
たんてき ぜんせかい
端的に全世界、
ぜんじんるい あい
全人類を愛することであり、
ほうし
奉仕することである。
ふへんてき へいわ
そして、普遍的平和と
ふへんてき じんるい あい じつげん
普遍的人類愛を実現するために
どりよく
努力することである。」

-アブドル・バハー-



沖縄の子供

お母さんが本を閉じました。レオ・トルストイの「何によって人は生きるのか？」を読み
おえたとおころでした。5人の子供は皆このお話を聞きながらベッドの上に横たわっていま
した。すると、突然一番年下のアニサが「何、どうなったの？」と言いながら起き上りまし
た。「靴屋さんが寒い雪の中を街から歩いてお家へ帰る途中、礼拝堂の裏で裸の男の人を見
つけたのよね。それで、その男の人を助けようとするところで、私、夢を見始めたの。男
の人はどうなったの？」するとシャラがため息をつきながら言いました。「あーあつ。アニ



サ、あんたはお話をほとんど聞いていなかったのね。」お

母さんが「しょうがないね。お話の大事なところを教え

てあげないといけないね。そうすれば皆ももっとお話し

が分かりやすくなるかもね。」と言いました。モナが話を続けました。「貧しい靴屋さんは裸

の男の人に自分の上着とブーツをあげて家に連れて帰ったの。」「そう、そう、奥さんにメ

チャ叱られたんだろ？」とリヤズが付け加えました。「でも、その後、男の人をかわいそう

と思って夕御飯を食べさせてあげたんでしょ？」とシャラが言いました。そこで皆が一斉

に言いました。「その時、男の人が微笑んで部屋が明るくなったでしょ！」お母さんが話を

続けました。「そう、その男の人はマイケルと名乗ったのよね。それから彼は靴屋さんの家族

と一緒に暮らし始めたの。」するとリヤズが口をはさみました。「その一年後、金持ちの紳士

が来て、最低一年は長持ちするブーツ作ってほしいと注文した時、マイケルがその紳士の後

ろをじっと見ていたんでしょ。」他の3人の子供たちもこの話に乗ってきました。「その時マ

イケルが再び微笑んだから、部屋が明るくなったんだ。」

お母さんが話しを続けました。「マイケルはそれから5年以上、その家族と暮らしました。あ

る日一人の婦人が、お店に入ってきました。そして、連れていた双子の女の子の靴を作っ

てもらいように頼みました。女の子の一人は足が不自由だったのです。」「そうなのよ。」

とモナがアニサの方を見ながら言いました。「その婦人はね、双子の女の子たちのお母さ

んじゃなかったんだよ。女の子たちの両親は女の子たちが生まれて1週間もしないうち

に亡くなってしまったので、その婦人は双子の女の子たちを気の毒に思って自分の子供の

ように育てたのよ。」

お母さんが続けました。「その婦人が店を出てから...」アスマがその後を続けました。「マイ

ケルは再び微笑んで、とても明るい表情になって、さようならと言ったんでしょ。」今度

はお母さんが続けました。「マイケルは自分が天使であること、そして6年前に神様からある

女性の魂を天国に連れてくるように言われたのだと告白しました。その女性は天国に連れ

ていかないでとマイケルにお願いしました。なぜなら、彼女の生まれたば

かりの双子の女の子たちはお父さんを突然亡くして、自分もいなくな

れば子供たちは生きていけないとマイケルに説明しました。マイケルは

彼女の願いを聞き入れて、双子の赤ちゃんを彼女の腕に手渡しました。し

かし、神様は従わなかったマイケルを叱りました。その罰としてマイケルは再び地球に送

られたのでした。」するとアスマが口を挟みました。「それにしても6年間も面倒を見てもら

ったのに、突然さようならとマイケルが言ったのはおかしいんじゃない？恩知らずだよ。」



モナが首を振って「それはちがうわ、マイケルは突然天国へ帰ったわけじゃないのよ。彼は最初の使命を果たすだけではなくて、罰として三つの教訓を学ぶために地球に送られたってちゃんと説明したでしょ？その三つの教訓を学んだら、また天国に帰れるとね。」するとシャラが質問しました。「お店に入ってきた双子の女の子たちは、マイケルが最初に助けようとした赤ちゃんだったの？」モナが答えました。「そうよ。マイケルが二度目に来た時、その母親はとうとう亡くなって、その時母親の体が赤ちゃんの足を押しつぶして怪我をさせちゃったのよ。」「かわいそうなマイケルと赤ちゃん。」とシャラが言いました。「マイケルは、ただこの親子を助けたかっただけなのにね。」リアズが跳びあがって言いました。「って、うん、なんで裸？天国では服を着ないの？」皆はどっと笑いました。すると、お母さんが言いました。「そうね、赤ちゃんだって、生まれて来る時は全くの裸でしょ。ところでマイケルが学ばなくてはならない三つの教訓って何だったかしら？」シャラが手を上げると、リアズが「学校じゃないんだから手を下せよ！」シャラはリアズにあっかんべーをして言いました。「一つ目は人間の中にあるものを見つけることでしょうか？」お母さんは上手に答えられたシャラに感心して言いました。「そうよ、人間の中にあるものでとても大事なものは何？」「答えは愛よ」とモナがすまして言いました。お母さんが「そう。」と答えました。「私たち人間にはみんな愛があります。マイケルは貧しい夫婦が見知らぬ他人である自分に親切にしたことで彼らの中に愛があるということを知ったわね。そのとき初めて微笑んだのよね。では、マイケルが学ばなくてはならない、あと二つの教訓は何だったでしょう？」子供たちはしばらく考えました。「あーっ、思い出した。」とリアズが言ったので、またジ



ヨークかと皆みんな思おもいました。しかしアは皆みんなを驚おどろかせるようなことを言いいました。「だれも自分じぶんに本当ほんとうに必要なひつようものを知しらない。」お母かあさんは、うれしそうに微笑ほほえみました。「そうなのよ。リアズ。マイケルは金持かねもちちの紳士しんしの後ろうしろにい

る死しの使つかいを見て、その紳士しんしがその日ひの内に死しぬことを知しった。でも、その紳士しんしは自分じぶんが死しぬとは知しらず、1年ねんも長持ながもちするブーツちゆうもんを注文ちゆうもんしたよね。たとえば、子供こどもが甘あまいものばかり欲ほしががるかもしれないけど、本当ほんとうは健康けんこうにいいものもちやんと食たべないといけけない。大人おとなだつて同おなじよ。地位ちいや名譽めいよばかり追おいかけて威張いばるより、本当ほんとうは周まわりの人ひとを大だい事じにして喜よろこばれる方ほうがどたのんなに楽たのしいか。マイケルがこの二ふたつ目めの教訓きょうくんを知しったとき、微笑ほほえみと明あかるさが一いっそう層ま増ましたでしょ？

さて、最後さいごにマイケルが学まんだ、三みつ目めの教訓きょうくんとは何なんだったでしょう？」再ふたびみんな黙だまってしまいました。「これは難むずかしい教訓きょうくんだと思おもうわ。何なんによつて人ひとは生いきるのか？つまり、人間にんげんはどのようにしてこの世よで上うま手いく生きていいくでしょう？」「答こたえは互たがいに助たすけ合あうことよ。」とモナが言いいました。「さすがモナ。」とお母かあさんが言いいました。「双子ふたごの女おんなの子こを連れんれてきた婦ふじん人が彼女かのじよたちを哀あれんで、自分じぶんの子供こどものように愛あいしたのを見て、マイケルは、人ひとは互たがいに助たすけ合あうものだということまなを学まんだのよ。それが三さん番目ばんめの教訓きょうくんだったのよ。それでマイケルが再ふたび微笑ほほえんだので、部へや屋中じゆうがぱつと明あかるくなつたのよ。私わたしたちは誰だれも自分じぶんが本当ほんとうに必要なひつようものは何なにかを知しりません。でも私わたしたちの周まわりを注ちゆうい意ふか深く見まわれば、周まわりの人ひとが必要ひつようとすることは分わかることがあります。神様かみさまは私わたしたち皆みんなで自分じぶん自身じしんだけではなく、周まわりの人ひとを手てつだいしようと言いわれているのよ。」皆みんなしばらく考かんがえました。そのときシャラが言い

いました。「^{わたし}私^{こども}たちは子供^{せかい}なのよ、^{ひと}どう^{たす}やって世界^{かあ}の人^{こた}を助^かけるとい^うのよ。」お母^{かあ}さんが答^{こた}

えました。「それ^{まわ}じゃあ、^{ひと}周^{じぶん}りの人^{かんが}のため^にに自^{かんが}分^ががで^きる^{こと}を^{よく}考^{かんが}えて^みて。」^{する}と

アスマ^{ぼく}が、「^{さんすう}そう^{しゅくだい}だ！^わ僕^{こま}は算^{ともだち}数^{たす}の宿^{たす}題^{たす}が^{こま}分^{ともだち}から^{たす}なくて^{こま}困^{ともだち}っている^{たす}友^{たす}達^{たす}を^{たす}助^{たす}け^{たす}よう！」

「^{おも}わ^{にもつ}た^{はこ}は、^{ひと}重^しい^{ひと}荷^{てつだ}物^いを^い運^いんで^いる^い人^いを^い見^いたら、^い知^いら^いない^い人^いでも^い手^い伝^いう^いわ。」^いと^いシャ^いラ^いが^い言^いいま^いした。

「^{おれ}じゃあ、^こ俺^{たす}は^いい^{なに}じめ^いら^いれ^いて^いる^い子^いを^い助^いける^いよ。」^いと^いリア^いズ^いが^い言^いいま^いした。「^い何^いを^い言^いっ^いて^いい^いる^いの^い！」

「^いモ^いナ^いが^い言^いいま^いした。「^いい^いじ^いめ^いて^いい^いる^いの^いは^いあ^いん^いた^いで^いし^いょ^い！^い自^い分^いを^い止^いめ^いる^いだ^いけ^いで^い皆^いは^い助^いか^いる^いっ^いて^い！」

「^{みんな}皆^{おおわ}が^{わたし}大^{こうえん}笑^{かし}い^{かみ}しま^{ひろ}した。私^{みんな}、公^ま園^いのお^い菓^い子^いの^い紙^いく^いず^いを^い拾^いう^い！」^い皆^いに^い負^いけ^いな^いい^いよ^いう^いに^いア^いニ^いサ^いが^い言^い

いま^いした。「^いみ^いん^いな^い良^いい^いアイ^いデ^いア^いよ。」^いと^いお^い母^いさん^いが^い言^いいま^いした。「^い覚^いえ^いて

お^いい^いて^いほ^いし^いい^いの^いは^い明^い日^いと^いか^い今^い週^いと^いか^いだ^いけ^いで^いな^いく、^い一^い生^い続^いけ^いる^いこ^いと^いよ。^いア^いブ

ド^いル^い・^いバ^いハ^いが^い言^いわ^いれ^いた^いよ^いう^いに^い『^い言^い葉^いだ^いけ^いで^い友^い情^いを^い示^いす^いこ^いと^いに^い満^い足^いし^いて^いは^いな^いら

な^いい。あ^いな^いた^いの^い道^いに^い出^い会^いう^い人^いす^いべ^いて^いに^い対^いし^いて、^いあ^いな^いた^いの^い心^いを^いや^いさ^いし^いい^い愛^い情^いで

も^い燃^いえ^いた^いた^いせ^いな^いさい。』^いさ^いあ^い！^いも^いう^い遅^いい^いから^い寝^いま^いし^いょう。」^いと^いア^いニ^いサ^いが^い「^いで^いも^いマ^いイ^いケ^いル^いは

ど^いう^いな^いっ^いた^いの^い？^い彼^いは、^い天^い国^いに^い行^いけ^いた^いの^い？」^いと^い言^いっ^いた^いの^いで、^い皆^い大^い笑^いい^いま^いした。「^いマ^いイ^いケ^いル^いは^い三^いつ

の^い教^い訓^いを^い学^いん^いで、^いと^いも^い明^いる^いく^いな^いっ^いて^い天^い国^いに^い帰^いっ^いた^いの^いよ。」^い.....^い「^いだ^いか^いら、^いお^いし^いま^いい。」^い.....

「お^いやす^いみ^いな^いさい！」

お^い母^いさん^いが^い子^い供^いた^いち^いに^い読^いん^いだ^い物^い語^いは^い次^いの^いペ^いー^いジ^いに^いあ^いり^いま^いす。



なに ひと い
何によって人は生きるのか

さくひん
レオ・トルストイの作品より



くつや つま いちまい ようひ うわぎ こうたい き びんぼう
靴屋のサイモンは妻と一枚の羊皮の上着を交代で着なければならぬほど貧乏で



した。ある日、サイモンは売り上げた靴の代金を集金するため

に街に行きました。そのお金でもう一枚の上着を作るはずでし

た。でも誰もサイモンにお金を払うことができませんでした。一人のお客さんの修繕用の

一足のブーツを持ち帰っただけでした。雪が降っている寒い中の帰り道で、



礼拝堂の前まで来たとき、その後ろに何か白いものが横たわっているのを見

つけました。近づいてみると、それは裸の男でした。驚きと戸惑いで、急い

でその場を立ち去ろうとしました。でも少し間を置いて自問自答しました。

「サイモン、お前は何をしているのだ？この男は死にかけているかも知れな

いではないか。事件に関わりたくないからといって、知られないように立ち去ろうというの

か？お前は追いはぎを怖がるほど金持ちになったことがあるのか？サイモン、恥を知れ。恥

を。」サイモンは思い直して裸の男のところに戻って来ました。よく見ると裸の男は今に

も凍え死にそうな若い男でした。サイモンは、その若い男に取りあえず自分の上着を着せ

て、持っていたブーツをはかせました。それから自分の帽子も取って、その男の頭に被せ

ました。しかし急に自分の頭が寒くなり、「この若い男は長いカールの髪があるのに自分

は禿なんだけどなあ。」と独り言を言いながら、帽子を自分の頭に戻しました。そうする

うちにその男が目覚めてきました。そこで心配そうに男に何が起きたのかたずねました。

男は答えました。「神様が私を罰したのです。」この答はサイモンには何が何だか理解で

きませんでした。でも、これ以上たずねる気になりませんでした。そこで取りあえず男を家に連れ帰りました。サイモンの妻は修繕用のブーツと彼らのたった一枚の上着を着ている見知らぬ男を見て、怒りだしました。サイモンは妻をなだめて、神の愛で人に接するやととしました。妻はしばらくして我にかえって怒るのを止めました。そしてその男を哀れみ始めました。妻はその家で最後の一切れのパンとスープをその男とサイモンに振舞いました。妻が優しくその男を見つめると男も笑みを浮かべました。だんだんと部屋の雰囲気も明るくなりました。その男は自分からマイケルと名乗り、行くあてがないと言ったので、サイモンと奥さんはマイケルの面倒をみることにしました。サイモンはマイケルに靴の作り方を教えました。

まもなくマイケルはその辺り一の靴職人になりました。そのおかげで靴の注文が殺到してサイモンの靴屋は大繁盛しました。やがてマイケルがサイモン夫婦のところで住み込みで働くようになって一年が過ぎました。そんなある日、一人の声が大きくかっぶくのいい金持ちの紳士が靴を注文しにやってきました。



その紳士は大変高価な皮を差し出して最低でも、一年長持ちするブーツを作って欲しいと注文しました。サイモンは自信を持ってそれを約束しました。その紳士が店にいる間、マイケルは紳士の後ろに誰かが立っているかのように見続けているではありませんか。そして不思議なことにマイケルは微笑んでいるのです。それはちょうど一年前にサイモンの妻がマイケルを哀れんで食事を与えた時に微笑んで以来の微笑みでした。マイケルのこの微笑みで部屋中がパッと明るくなりました。紳士が去

ってからサイモンはマイケルにそのブーツをつくように頼みました。マイケルは直ちに仕事に取りかかりました。次の日にはマイケルはその高価な皮でスリッパを作り終えようとしていました。注文されたブーツではないのを見たサイモンは驚いてマイケルを怒鳴りつけました。ちょうどその時、ドアを叩く音がして、紳士の召使が入って来ました。そしてブーツを注文した後の帰宅途中で紳士が馬車の中で亡くなったと告げました。という訳でブーツはもはや必要ではなく、代わりにその紳士の遺体に、やわらかいスリッパが必要になりました。マイケルは紳士の召使にスリッパと残った皮の切れはしを手渡しました。しかしどうしてマイケルがこの状況を知らなかったのかサイモンは不思議に思いました。

それから5年が過ぎました。その間マイケルが微笑んだのは後にも先にもたったの2回

だけでした。サイモンの妻が彼に食事を与えた時と、彼が紳士の後ろを見た時だ

けでした。やがてマイケルがこの夫婦のところで住み込んで6年が経ちました。

そんなある日、サイモンの小さい息子がマイケルに言いました。「見て、マイケル

おじさん、二人の小さい女の子を連れて女の人がこっちにやってくるよ。あっ、

女の子の一人は足が不自由みたいだよ。」マイケルは跳び上がって窓に近づいて

外をのぞき込みました。その婦人は双子の女の子を連れて店にやってきました。婦人はサ

イモンに双子の女の子のために可愛い靴を作るように注文しました。婦人は双子の女の

子を膝の上のせて、サイモンに足のサイズを測るように頼みました。マイケルはその双子

の女の子をまるで前から知っているかのように懐かしそうに見つめていました。婦人はそ

の女の子たちの母親ではないのだと言いました。女の子たちの両親は二人とも女の子た



ちが生まれた、その週しゅうの内に亡なくなりました。女おんなの子たちには身こよりもなく可哀相かわいそうだった

ので自分じぶんが引き取ったのだと説明せつめいしました。そして、まるで自分の子このように育ててきまし

た。それを聞いてマイケルは部屋全体へやぜんたいがパッと明るくなるほどの微笑ほほえみを見せました。

婦人ふじんと女おんなの子たちが店みせを出た後あと、マイケルが突然とつぜん「さようなら、御主人様ごしゅじんさま。」と言い出し

ました。サイモンは驚おどろいてたずねました。「何なんだって？どこかに行いってしまうのか？」マイ

ケルが答こたえて言いいました。「神様かみさまのお許ゆるしが出たので、天国てんごくへ帰かえります。」サイモンが、さら

にたずねました。「マイケル、やはりお前まえが普通ふつうの人ひとではないことは気付きづいていた。ちょっ

と気きになることがあるのだけど、この6年6ねんの間あいだ、たった3度たびしか微笑ほほえまなかったのは何故なぜだ

い？そして、微笑ほほえむ度にだんだん明るあかくなったのは何故なぜだい？」マイケルが答こたえて言いまし

た。「実は、私わたしは天使てんしなのです。6年前ねんまえ、神様かみさまは双子ふたごの母親ははおやの魂たましいを天国てんごくに連れれんて来きよう

に私わたしに言いいつけられました。その母親ははおやはちょうどの双子ふたごの女おんなの子たちこを産うんだ時ときでした。

母親ははおやは私わたしにお願いねがいだから彼女かのじょの魂たましいを天国てんごくに連れつていかないでと頼たのみました。彼女かのじょ

主人しゅじんがつい最近さいきん亡なくなったところなので、彼女かのじょがいなくなると誰だれも双子ふたごの娘むすめたちの世話せわを

する者ものがいなくなってしまうというのです。だから私わたしは彼女かのじょを信しんじて彼女かのじょの腕うでに赤ん坊あかぼうを

残のこして天国てんごくに帰かえったのでした。彼女かのじょをちゃんと連れつてくるように神様かみさまが私わたしを再ふたび地上ちじょうに送おく

りました。私わたしが、彼女かのじょの魂たましいを取とると、母親ははおやの体からだが赤ん坊あかぼうの一人ひとりの足あしを押おしつぶしてし

まいました。彼女かのじょの魂たましいが天国てんごくに上あがると同時に私わたしの羽どうじが取われ、私わたしは裸はねで地上とに落おち

ました。私わたしの罰ばつというのは地上ちじょうで3つの教訓きょうくんを学まなぶことでした。何なにが人ひとにはあるのか？

何なにが人に与あたえられていないのか？ 何なにによって人ひとは生きるのか？ という三つみつの教訓きょうくんです。

その一つ一つを学ぶたびに私は微笑み、だんだん明るくなったのです。最初の教訓、何が
人にはあるのか？を知ったのは、あなたの奥さんが見知らぬ私を哀れんだ時でした。その時、
私は誰か他の人の世話で生かされていると知りました。あなたの奥さんが私を愛している
と知ったとき、奥さんの中に神様を見ました。そこで人の中には愛があると知りました。だ
から、そのとき嬉しさのあまり私は微笑んだのです。2番目の教訓は金持ちの紳士がここ
にやって来たとき学びました。その紳士は一年も長持ちするブーツが欲しいと注文しまし
た。しかし、私は紳士の後ろに死の天使が立っているのを見ました。そして、この紳士は日没
までには亡くなってしまおうと分かりました。この時、何が人に与えられていないのか？を知
りました。人は自分自身に本当に必要なものは何かを知らされていないことです。それを知
った私は嬉しさで再び微笑んだのでした。そして、とうとう今日、私は天国へ連れて行っ
た母親の双子に会いました。その母親は私にこう言いました。「娘は親の愛なしでは生き
られない。」しかし、見知らぬ人でも愛と世話があれば問題ないはずです。私はその時最後
の教訓、何によって人は生きているのか？を知りました。すなわち互いの愛と世話によっ
て人は生きているのです。この三つの教訓から人はバラバラになって生きるのではなくて
和合を持って生きようと神様が望まれているのだと学びました。人は自分自身のため
ではなく、すべての人のために生かされていると神様は教えられているのです。人はそれぞれ
自分自身のためだけに生きているように見えるけれども実は互いに助け合いながら生きて
いるのです。」そう言って天使のマイケルは天国へ帰りました。そして、店は以前のように
サイモンとその家族だけになりました。

どうやって奉仕できるか

お話しの中の子供たちのように、どうやって皆さんの周りの人をお手伝いできるか考え

てみましょう。もちろん、どんな報酬も期待しないでやってみるといいですね。みなさん

がお手伝いしたと気づかれないよう秘かにお手伝いしてみてもいいでしょう。

1) 家族の誰かの_____を手伝う。

2) 学校の誰かの_____を手伝う。

3) 近所の誰かの_____を手伝う。

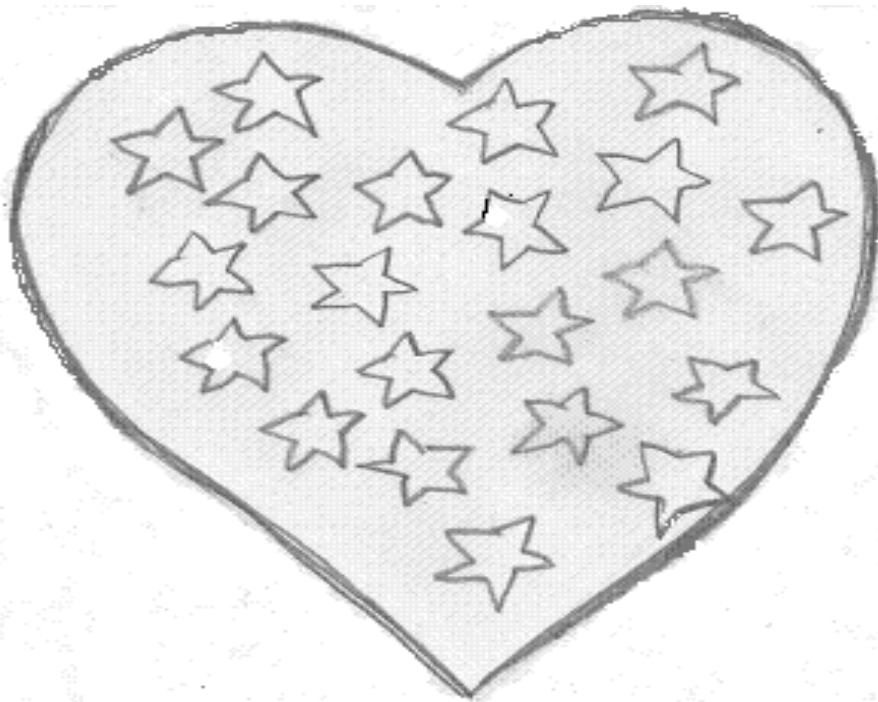
4) 見知らの誰かの_____を手伝う。

5) 秘かに誰かの_____を手伝う。

誰かのお手伝いをする度に皆さんのハートの星に色を塗りましょう。

「神は汝に名誉の冠をかぶせ、汝の心に光り輝く星をちりばめ給う。真にその光は

全世界を輝かせよう。」 アブドル・バハ



ティッシュを使ったアート



材料

プラスチック容器のフタ
色付きのティッシュ
のり
絵の具用の筆
爪楊枝
パレット
塗り絵の絵
マジックマーカー

作り方

1. プラスチックの下に塗り絵の絵を置きます、プラスチックにその絵をマジックマーカーでなぞります。
2. のりに少し水を混ぜてブラシが濡れる薄さにします。
3. ティッシュを小さくちぎってそれを絵の上のにりで貼り付けます。

(爪楊枝を使って小さくちぎった紙を動かすことができます。)

さらにティッシュの上にものりを筆で塗ります。(よく濡らすことでティッシュ

が動きやすくなります。)

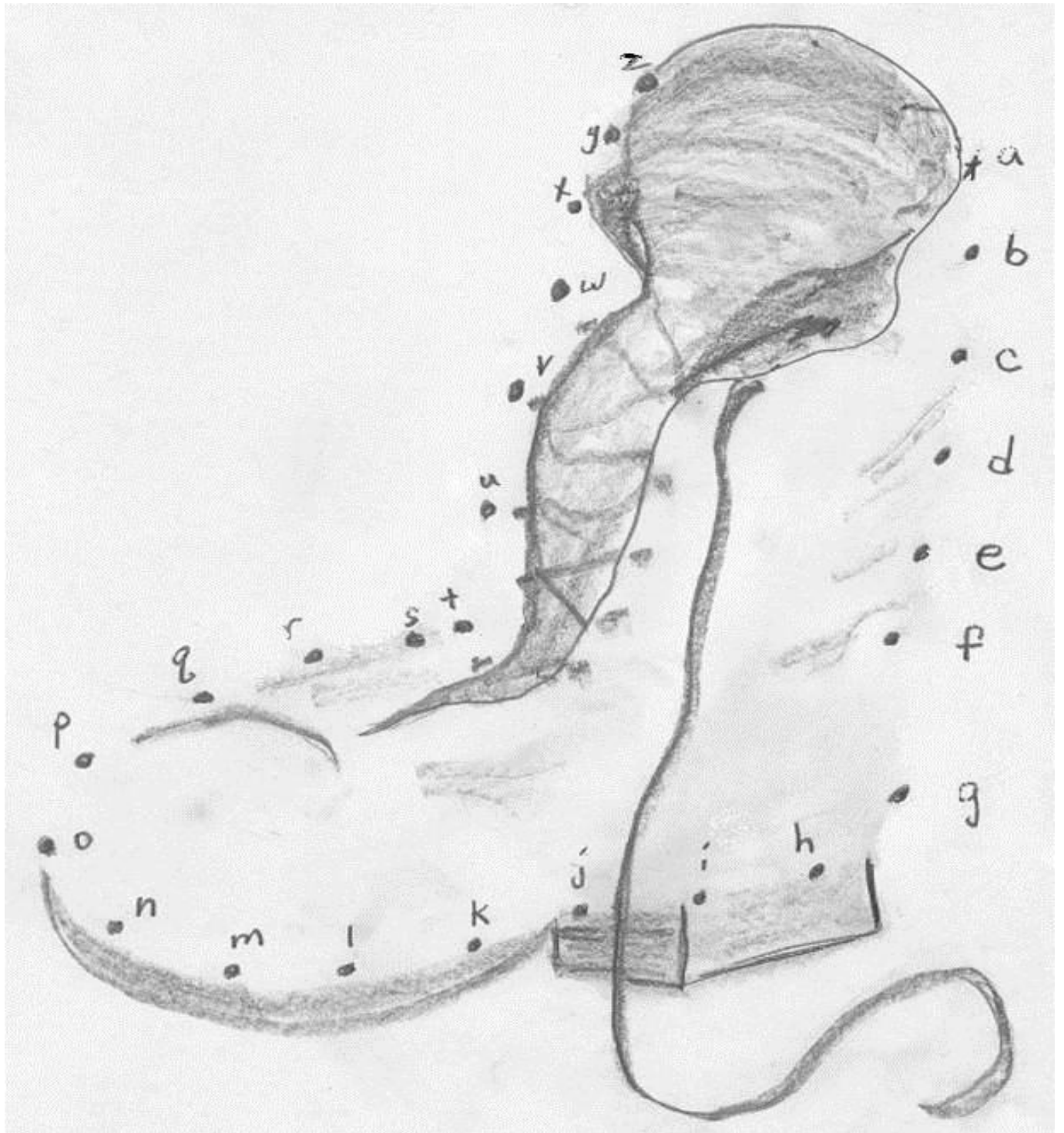
4. 絵を乾燥させます。その後、絵の上に穴をあけて糸を通して窓か壁に吊るします。

a から b へ....

b から c へ....

てん 点をつなげて なに 何が み 見えますか？

サイモンが しゅうふく 修復してくれるブーツでしょうか？



みんなの^{しゃしん}写真



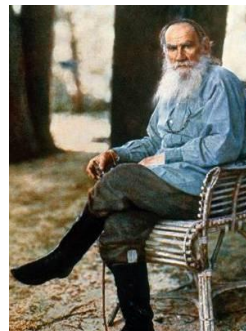
みんなのこうさく工作



両親のページ

[おお神よ、これらの子供を守り給え。彼らが教育されるよう慈悲深く助け給え。そして彼らが人類世界に奉仕できるようなし給え]

トルストイはバハオラとその教えを知っており、彼の作品にはバハオラの多くの教えが使われているのが見られます。もちろん、これらの教えはすべての偉大な世界宗教にも見られます。トルストイの作品には人間の高尚な姿が豊富に見られます。彼の短編の多くは奉仕、哀れみ、愛とは何かを子供に教えるには最適です。私たち親は、言葉とか文化や道徳教育を豊かにする、トルストイや他の偉大な作家の作品を子供に紹介することで子供の世界観を広げることができます。普通の図書館だけでなくコンピューターのオンラインシステムによる図書館でも子供と音読するにはもってこいの素晴らしい物語が用意されています。



バハオラの教えとトルストイの関係について、トルストイはこのように応えています。[なんで バハオラとその教えを私が反対できようか。はっきり言って、この教えは必ずや全世界を制覇するでしょう。] バハイ信教の原則はこの新時代の精神とちょうど一致しており、人類の福利を確立しながら、しっかりと世界に根付くとトルストイは見ていました。¹

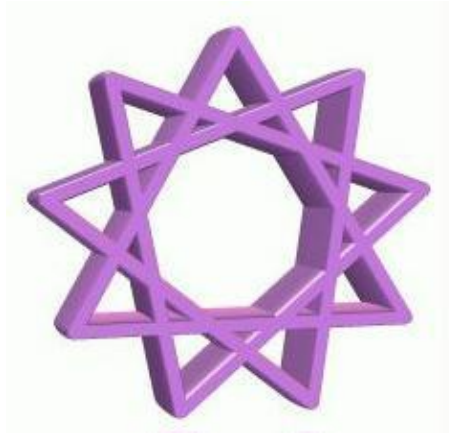
レオ・トルストイは晩年にバハオラによって発展させられたバブの教えが宗教の最も高貴で純粋な教えを代表するという結論に達しました。1910年に彼が亡くなる少し前トルストイはバハイ信教について次のように書いています。「バハイ信教は深い意味があり、これほど深い意味を持つ宗教は他にはないと私は思う。」²

1. Moojan Momen, The Babi and Bahá'í Religions, p.30

2. Tolstoy, Complete Works, v. 78, p. 306

<http://www.bahaindex.com/documents/tolstoy.pdf>





皆さんのお子様のバハイ活動でみんなに役に立つ
いいお話、又は写真などがあれば、送ってください。

vb7mb7@bma.biglobe.ne.jp に送ってください。

ひるの星

No. 238

2009年6月発行

ひるの星をカラー印刷するには以下のリンクにアクセスしてください。

<http://www.bahaijpn.com/daystar.htm>

日本バハイ全国精神行政会

〒160-0022 東京都新宿区新宿7丁目2番13号

電話：03-3209-7521 FAX：03-3204-0773

ひるの星委員会：平原静志、平原ルアナ、マックティアー・理恵

協力

物語：トルストイ、平原ルアナ

和訳：平原静志、平原朝真

写真：サナ・マジズーブ、カレン・ガードナー

絵：ラリー・カーティス、子供クラス、平原ルアナ、
サナ・マジズーブ

テクニカル・アドバイザー：メイヤー・ニコラス、平原朝真

監修：平野祐一